

# 共生の実相

命の線引きを問う

2016年7月に発生した相模原の障害者施設殺傷事件を受けて、入所施設に対する批判が噴出した。1970年代に本格化した身体障害者を中心とする運動は「施設ではなく地域で」という目標を掲げ、今や国の目標にもなっている。

事件後、運動側からは被害者について「施設に入れられたことで殺された」とする声明も出された。重症心身障害がある長女が施設で暮らしているフリーライター・児玉真美さん(62)は、広島県呉市に、口をふさがれ、発言を封じられているような思いがしたという。「入所させ、殺した」。そう名指されたと感じた家族もいる。

真美さんは障害者運動に敬意を持ち、目指すべき「地域移行」という方向にも賛同している。だが重症心身障害がある人の地域移行には専門的な医療が不可欠で、慎重さも必要だ。都市と地方の格差も大きい。医療に経営優先の傾向が強まる中、重症の人が受診

# 「入所させ、殺した」苦悩も

を拒否されたという声が増えている。真美さんは「地域の資源が整わないままの地域移行は、家族依存を加速させ、命を脅かす危険が現に生じている」と言う。

そうした現実が「施設は悪」「今すぐ地域へ」という声にかき消されないか。「障害者、親という弱い者同士で

争われ、公的責任が問われなくなる事態が心配です」

今年6月、広島県尾道市の映画館でドキュメンタリー映画「道草」が上映された。重度の知的障害のある人が、重度訪問介護という制度を使い、地域で介護者と自立生活を送る姿を追った作品だ。相模原の事件で一時心肺停止に陥った尾野一矢さん(46)が自立生活を模索する様子も描かれる。事件後の「希望」を探る映画として全国に上映が広がっている。

上映後、真美さんは宍戸大裕監督(37)と対談した。映画の中の豊かな生活に共感する一方、娘の海さん(31)を「入所施設に入れざるを得なかった

罪悪感に触れた。「親としての私は、この映画に脅かされる」と本音を語った。そして地方の支援資源の少なさを指摘し、障害の程度による事情の違いがある、とも説明した。

映画のパンフレットには「施設に『入れてコロシタ』と名指された」と感じた家族の文章も掲載されている。宍戸さんは「親を責めたくない、自立生活があるよ、で終わらせたくない。じゃあ誰と一緒に暮らすのか。手を挙げる人が現れてほしい」と会場に呼び掛けた。

映画は暴れたり、大声を出したりしてしまう当事者、苦悩する親や支援者の表情も映し出される。真美さんは「これさえあれば問題解決という描き方ではなく、悩みながら模索しているという問い掛けがある」と評価した。

対談後の夜の酒席。宍戸さんは「厳しい意見を言ってくれるからこそ一緒に話があった」と語った。相模原の事件から3年。異なる立場の者同士が互いの言葉に耳を傾ける場も開かれつつある。



映画「道草」について対談する児玉真美さん(左)と宍戸大裕監督(6月、広島県尾道市)

## ⑥ 障害者と親、対立の行方